

# 「アメリカ10週間留学プログラム」の教育効果： 参加学生の人的成長に焦点をあてて

塩田 賀津子<sup>1)</sup>

## Educational Impact of the “10-Week Study Abroad Program in America”: Focusing on the Personal Growth of a Participant

Kazuko Shiota

### Abstract

The “10-Week Study Abroad Program in America” offered by the Department of Modern Communication was identified by Shiota (2023) as lacking appeal in the job-hunting market when presented as a significant extracurricular achievement. However, students who participated in the program consistently reported post-program outcomes such as “reaffirming the value of Japan,” “appreciating the importance of parents,” “gaining confidence,” and “understanding the importance of English.” This suggests that, even if it does not directly enhance employability, students clearly gained valuable experiences. According to “Tobitate! Study Abroad JAPAN,” studying abroad is expected to foster personal growth. This study investigates whether the “10-Week Study Abroad Program in America” promotes personal growth and reports on its educational effects.

**key words:** America, study abroad, English, junior college, educational impact, human development

**キーワード:** アメリカ, 留学, 英語, 短期大学, 教育的効果, 人的成長

### I はじめに

「トビタテ！留学JAPAN」とは、文部科学省が2013年に開始した留学促進キャンペーンであり、その専用ウェブサイト上では、留学について、

これまで生きてきた「枠」(Comfortable Zone)の外(Stretch Zone)へ一人で踏み出し、海外というアウェーな環境で苦労や葛藤を乗り越える経験をする。

と定義している。

続いて、留学という経験は「人を大きく成長さ

せる」としている。具体的には、留学によって得られる6つの機会(外から日本(外)を見る機会・知らないことを知り、知りたいことを知る機会・違う価値観に触れ、意味を知る機会・己のことや日本を知る、知りたいと思う機会・飛び込むことに自信を持つ機会・逃げないで苦労する機会)を通じて、それぞれに6つの成長(視野の拡がり・世界への関心・多様性受容・アイデンティティ・自己肯定感・ストレス耐性の向上)が期待されると説明している。

Kauffmanら(1992)においても、留学によっ

1) 育英短期大学現代コミュニケーション学科

て大きく影響される感情的要因として「個人の成長」が特定されている。

塩田 (2023) は、育英短期大学現代コミュニケーション学科が主催する数あるプログラムのうちのひとつである「アメリカ10週間留学プログラム」は、参加学生らの「就活に役立てたい」との期待とは裏腹に、目立ったアピール力に乏しく強いガクチ力にならないことが課題であると指摘している。しかしながら、参加学生らが帰国後に「日本の良さを再認識した」「親のありがたみがわかった」「自信がついた」「英語の大切さがわかった」などと口々に報告するところを見ると、「アメリカ10週間留学プログラム」にも、個人の成長においては何らかの効果があるのではないかと考えたことが、本研究を行うに至った動機となった。

## II 「人間的成長」とは

大学教育における学生の成長を分類し説明する理論のなかでも評価を確立しているもののひとつに Student Development Theory (Chickering and Reisser, 1993) がある。同理論は、大学教育を通じて学生は以下の7つの領域 (vector) において成長すると主張する。

- (1) Developing Competence (能力の発達)
- (2) Managing Emotions (感情の管理)
- (3) Moving Through Autonomy Toward Independence (自律から相互依存への意向)
- (4) Developing Mature Interpersonal Relationships (成熟した対人関係の発展)
- (5) Establishing Identity (アイデンティティの確立)
- (6) Developing Purpose (目的の発展)
- (7) Developing Integrity (人格・価値観の統合)

同理論は留学に特化したものではないが、言語や文化の違いこそあれ、渡航先で一般家庭にステイし大学に通うという形態は、日本で自宅から本

学に通う日常と同様と言える。

古家・石黒 (2021) の研究では、留学の成果の中でも曖昧な概念とされる人間的成長を分析する際、同理論および Evans (2003) を基に足立 (2010) が示した視点を踏まえている。

本研究では、これら先行研究を参考に、7つの領域を留学に適用したうえでそれぞれへ「トビタテ！留学JAPAN」の6つの成長を分類した。したがって、以下のような言動・態度をもって、人間的に成長したか否かについて解釈・判断することができよう。

### (1) Developing Competence (能力の発達)

留学は、知識を広げるだけでなく、異なる文化や教育システムに適応することで、知的能力、身体的な挑戦、そして異文化間での人間関係能力を養う絶好の機会である。好奇心をもって知識を深め、目標を達成し、異なる環境に適応する力が育まれ、困難な状況でも自信を持って行動できるようになれば、この項目において成長があったとみなすことができる。「トビタテ！留学JAPAN」において期待できるとされる6つの成長のうち、①視野の拡がり、②世界への関心、⑤自己肯定感がこれに含まれる。

### (2) Managing Emotions (感情の管理)

留学生活では、異文化適応の過程で多くの感情的な挑戦が待っている。新しい文化や生活環境に直面することで、ストレスや不安、孤独を感じることもありえるが、これらの感情を理解し、適切に対処する力を身につけ、同時に、異国での新しい出会いや発見がインスピレーションや楽観主義を生み出し、自分の感情を前向きに管理できるようになれば、この項目において成長があったとみなすことができる。「トビタテ！留学JAPAN」において期待できるとされる6つの成長のうち、⑥ストレス耐性がこれに含まれる。

### (3) Moving Through Autonomy Toward Independence (自律から相互依存への意向)

留学は、自立を促進する大きな経験である。家族や友人から離れて一人で問題を解決する力や、自己主導で行動する能力が求められる。しかし、同時に、現地の友人やサポートシステムとの相互依存の重要性にも気づき、コミュニティの一員として共に成長することを学べたとき、この項目において成長があったとみなすことができる。

### (4) Developing Mature Interpersonal Relationships (成熟した対人関係の発展)

異文化での生活は、他者とのコミュニケーションスキルを高め、異なる価値観や習慣を尊重する力を養う。多様なバックグラウンドを持つ人々との交流を通じて、他者を理解し、長期的で親密な関係を築く力が育まれる。これにより、異文化間の寛容性が強化され、他者との深い絆が形成されたと感じたとき、この項目において成長があったとみなすことができる。「トビタテ！留学JAPAN」において期待できるとされる6つの成長のうち、③多様性受容がこれに含まれる。

### (5) Establishing Identity (アイデンティティの確立)

留学は、自己認識を深める重要な機会でもある。異なる文化や価値観に触れることで、自分の背景、性別、アイデンティティ、社会的役割に対する理解が深まり、自己への安心感と自信が増す。異文化の中で自分がどのように見られているかを経験し、それを踏まえて、自己のアイデンティティをよりしっかりと確立できたとき、この項目において成長があったとみなすことができる。「トビタテ！留学JAPAN」において期待できるとされる6つの成長のうち、④アイデンティティがこれに含まれる。

### (6) Developing Purpose (目的の発展)

留学は、自分の未来やキャリアに対する視野を

広げる機会でもある。異国での生活や学びを通じて、自分の目標や将来の計画に対する確信を深め、それに向かって進む決意が固まる。新しい環境で直面する困難に対処しながら、決断力や持続力を身に付けることで、自分の目的に沿った道を切り開いていく力が育ったとき、この項目において成長があったとみなすことができる。

### (7) Developing Integrity (人格・価値観の統合)

留學生活では、異なる文化や価値観に直面することで、個人の価値観を人間らしいものへと発展させるプロセスが始まる。他者の信念を尊重しつつ、自分の信念を明確にし、これを行動に反映させる力が求められる。留學経験を通じて、行動と信念が一致した誠実な生き方を追求できるようになれば、この項目において成長があったとみなすことができる。

## III 調査方法

### III-1 対象プログラム

先述のとおり、「アメリカ10週間留學プログラム」とは、育英短期大学現代コミュニケーション学科が主催する数あるプログラムのうちのひとつである。カリフォルニア大学アーバイン校に付属する生涯教育部が提供するESLにおいて、アカデミックな英語スキルを向上させるための学習に励むほか、ホームステイ体験を通じ異文化理解に努めることを目的とするものである。

このプログラムへの参加学生は、例年初級レベルのクラスへ配置される。塩田(2023)によれば、初級クラスの授業は、英会話が自由でない学生らで構成されるため、そのダイナミクスは活発と言いつても難しく、オールイングリッシュで行われる以外は、いわゆる「日本では典型的な、かつ伝統的」なものが主流であるといい、授業が終了したあとも参加学生らは特に予定なく過ごしがちな状態であると報告している。たいていの場合、「10週間も滞在する

なら」と、留学経験を強みとして就活に活かしたいと願い参加を決意する。にもかかわらず、参加学生らの中間報告には、受け身の姿勢が見え隠れし、同じことの繰り返しで新しいことを自ら切り開く挑戦も見えず、問題解決に取り組んだ末の感想というものも得られなかったとして、「アメリカ10週間留学プログラム」は企業が求めるガクチカになりえない、何かしら語れるような経験をお膳立てすべきではないか、と提言している。

### III-2 対象者

しかし、これまでの参加学生らは、就活に活かせなかったという不満を口にしないわけではないものの、それ以上に、日米間の文化の違いへの気づきや、自分自身の変化について語る傾向がある。

「アメリカ10週間留学プログラム」が「人間的成長」を促すのかを調査するため、昨年度の参加者のうちのひとりで、顕著な行動の変化（渡米前は英語学習に積極的でなかったが、帰国後英会話スクールに定期的に通うようになり、英語学習を習慣化させたこと）が見て取れた学生1名に、参加からちょうど1年が経過した時期に、記述式のアンケートへ回答してもらった。インタビューにせず記述式の回答とした理由は、留学中毎日つけていたという日記を参照しつつ回答する余裕を与えることにあった。対象学生には調査の趣旨を説明し、提供されたデータは研究目的にのみ使用することを説明し同意を得た。質問は「留学前から現在のきもちを思い出し、それを言語化してください。その際、そこにかかわった人や状況なども詳細に記してください。ただし、できるだけ日記の記述内容を忠実に踏まえるように注意してください。」と依頼した。得られたデータは、上述の「人間的成長」を構成する項目にそれぞれ照らし合わせ考察する。

## IV 調査結果

得られたデータを、上述の「人間的成長」を構成する項目にそれぞれ照らし合わせると以下の表のとおりとなった。なお、データは対象学生が記述したままを転載している。

## V 考察

まずは7つの領域のうち1つめの「能力の発達」、そこに含まれると解釈する6つの成長経験のうち「視野の広がり」「世界への関心」「自己肯定感」について検討する。即時的な英会話自体がほぼ初体験であったことより、渡米当初は「頭ではわかっていることができない」もどかしさを感じ、危機感を持ったようである。「英語で話さないところで馴染めない」という記述より、日本語のみで事足りる環境を飛び出し、ようやく留学の実感を持ちえたこと、腹をくくったことがうかがえる。もがきつつも英語によるコミュニケーションの場数を経験し、1か月が経過するころには「通じる喜び」を体感するに至り、世界への視野が広がり、さらには「挑戦したことによる達成感」を得て自己肯定感を持ったと思われる。

次に、「感情の管理」、そこに含まれると解釈する6つの成長経験のうち「ストレス耐性」について検討する。最初のうちはホームシックに苦しんだようである。テキストおよびオンライン画面を通じて留学担当者が状況について確認した際、この頃本人も述べるとおりかなり精神的に落ち込み表情もさえない印象であった。上述のとおり、否応なく英会話の必要性に迫られ、そのおかげで人との交流が増え、次第と気持ちがほぐれたようだ。目をみはるべきは「必要なことを最小限話す」から「自己表現に挑戦する」といった変化であろう。ここにストレスと戦い見事に自身の感情をコントロールできた成長があったことがわかる。

3つめの「自立から相互依存」について検討す



7つの領域 (vector)	6つの成長経験	アンケート回答
(1) Developing Competence (能力の発達)	①視野の拡がり ②世界への関心 ⑤自己肯定感	<p>「(スタート時) 英会話が困難な分、表情とかジェスチャーを大きくしなきゃってわかりつつも難しくて (中略) 日本語がふと出てしまう時もあるって、その時に通じないって顔をホストブラザーがしてて、その時の顔がすごい頭に残ってます。あ、やばい、英語で話さないところで馴染めない、って思いました。」</p> <p>「(1か月経過ごろ) 英語ってやっぱ世界の共通言語で、話せれば世界の人と友達になれる！ってワクワクしました。」</p> <p>「(2か月経過ごろ) 授業の後に先生と話したり、休み時間にクラスメイトと話す事がとても増え、日本人同士でいても英語を話さってという環境が自然と出来てました。」「感謝祭とかがあって (中略) ご飯食べる前にひとり一言感謝についてのスピーチをして、それを直前に言われたので考える暇もなくめっちゃ焦りました。少ない時間で頭の中で考えながら発言して (中略) なんかその時に英語を自分のモノに出来てるなって改めて実感出来て凄く嬉しかったです。自分ちゃんとコミュニケーション取れてるんだって！自信にも繋がりました。」</p>
(2) Managing Emotions (感情の管理)	⑥ストレス耐性	<p>「(スタート時) 私がホームシックで部屋で泣いていた時とかホストブラザーが来てくれて」</p> <p>「(現在) 人見知りが少し治ったかなって感じです。気持ちの問題的には。自分に自信がついたし、自分らしくって思ってたので、無理に頑張ったりする事が減りました。」</p>
(3) Moving Through Autonomy Toward Independence (自律から相互依存)		<p>「(2か月経過ごろ) 今まででは出来る事は自分の中で解決して済ませようと思ってたけど、そこを解決するまでにホストファミリーを挟んでみたり、ちょっと頼みたいことがあったら遠慮せず言ってみたり」</p>
(4) Developing Mature Interpersonal Relationships (成熟した対人関係の発展)	③多様性受容	<p>「(2か月経過ごろ) 一緒にいたら安心出来る関係になりました。今までみたいな「楽しい」だけでなく、それプラス「この人達がいるなら大丈夫」っていう安心を感じるようになりました。」</p>
(5) Establishing Identity (アイデンティティの確立)	④アイデンティティ	<p>「(1か月経過ごろ) やっぱブロンド良くなって思って、染めたくなりました」「メイクは薄くなったと思います。」</p> <p>「(帰国直前) 日本での家族の大切さに19年目にして気付かされたって感じでした。」</p> <p>「(帰国後) 私弟と話す度に喧嘩するような関係なんですけど、ホストファミリーの関係や家族への配慮の仕方を見て、弟に何言われて優しくしようって決めてました。もっと大切にしないかなって。そして今まで以上に家族に対しての感謝とか、遠慮せず頼るとか、そーゆー当たり前の事をもっと沢山しようって思いました。コミュニケーションとかも含めて」</p> <p>「(現在) 友達にはしたい服装しなとか、アメリカで教わった事を今では私が偉そうに言っちゃったりしてます。」</p> <p>「(現在) 人見知りが少し治ったかなって感じです。気持ちの問題的には。自分に自信がついたし、自分らしくって思ってたので、無理に頑張ったりする事が減りました。」</p> <p>「(現在) (海外の人が) 日本に居てくれる事がむしろ嬉しいって思うようになりました。日本の風景とかご飯を食べた時の海外の方の反応が直で見れるのも嬉しいです。」</p> <p>「(現在) コミュニケーションも自分に自信が持てるようになったので、就活の面接とかでも緊張したけどやっぱ自分を思う存分出せるようになりました。」</p> <p>「(現在) 英会話の塾に通い始めるようになりました。(中略) 塾の先生は仕事大変で早く帰りたいって凄く言っていました。なんかここでもアメリカと日本での働き方とかマインドの持ち方の差とか感じちゃって悲しくなっていました。逆ホームシックみたいな感じでした。」</p>
(6) Developing Purpose (目的の発展)		該当する記録なし
(7) Developing Integrity (人格・価値観の統合)		該当する記録なし

る。「トビタテ！留学JAPAN」ではこうした項目への言及はなかったが、対象学生の日記には印象的なこととして記録があった。最初は自分のことは自分で、と突っ張ってきたという。おそらく日本的な遠慮だったり英会話の不自由さからであっただろうが、英語でのコミュニケーションに慣れるに従い、自信をもち、さらには「思いや考えを率直に言う」というアメリカの文化を自身の行動に取り入れている様子がうかがえる。そこに対象学生がホストファミリーと信頼関係を築くにいたったという成果もみてとれよう。

4つめの「成熟した対人関係の発展」は、6つの成長経験のうち「多様性受容」を含むと解釈できる。次はこの項目について検討する。ホストファミリーに対し、「安心できる」「楽しいだけでなく大丈夫と思える」関係になったという。先に「自分で解決できるようなこともホストファミリーを頼ってみる」との記述について考察したとおり、良い関係を構築できたという成果を自身でも実感していることがわかる。最初とはまどった異文化・異言語の環境を受け入れ、すっかりなじむという成長を果たしたことが明らかであろう。

対象学生から得たデータは、5つめの「アイデンティティの確立」に関するものが最も多かった。これは単純に日本とアメリカが文化的にも言語的にも違いが大きいため当然と言えば当然であろう。最初の頃は日本人としての自分の姿かたちを意識したとみられる。金髪にあこがれるものの自分に似合わないと感じ断念したり、アメリカ人のみならず周囲の留学生らのメイクの薄さに気づきを得たりしたようだ。そうした対比の中で「自分らしさ」を探求し具体的なイメージをつかんだようにもうかがえる。

また、ホストファミリーの中では名目上家族の一員として処遇されているとはいえ、かえって日本の家族を強く意識するに至ったようだ。これらのことより、対象学生が留学中自身のバックグラウンドに思いを馳せ「自分は何者か」を探り続け

なんらかの答えを得たことがわかる。

6つめの「Developing Purpose」、(目的の発展)、7つめの「Developing Integrity」(人格・価値観の統合)にカテゴライズできるような記述はなかった。10週間という短期間ではそこまでの成長は難しいと、単純に時間の問題であろうと断ずるのは早計かもしれない。事前事後指導において、キャリアについて強く具体的に意識することができるよう、アメリカ文化についてのみならず日本文化についても深掘りした学習をさせるなど工夫することで達成できる可能性があると考ええる。

## VI 結論

本研究では、塩田（2023）により「就活市場においてガクチカとして語るにはアピール力に欠け、参加学生らの期待に反する」との課題を指摘された現代コミュニケーション学科主催の「アメリカ10週間留学プログラム」に個人の成長を促す教育効果があるのかどうか、あるとしたらどのような成長が期待できるのかということについて調査した。

結果、対象学生は、Student Development Theory (Chickering and Reisser, 1993) における7つの領域のうち5つについて成長が確認できた。また、「トビタテ！留学JAPAN」が示す「留学で得られる6つの成長経験」に関してはすべての項目を満たすことが確認できた。対象学生が帰国後自主的に英語学習に励むほどの変化を示したわけである。

学生のパーソナリティやホストファミリーとの相性など、一定でない要素があることは否定できないが、それでも当プログラムには人間的成長という点において教育的効果が期待できることがわかった。

今後のプログラム設計においては、就活に強いガクチカを含めるのみならず、今回達成しえなかった人間的成長の項目においても成果があがるよう、事前事後指導において支援することが必要

であろう。

今回取り扱ったデータは1名の対象者からのみのものでしかなく一般化することはできない。また、当時の日記に忠実に基づくよう依頼したとはいえ、時間が経過しているために解釈が多少美化されている可能性は否定できない。こうした懸念を払拭すべく、今後は、毎年すべての参加者についてデータの記録および提供についての協力を求め、継続的に調査することとしたい。

## VII 参考文献

足立恭輔（2010）「大学学部課程における海外留学の教育的価値とカリキュラムにおける位置づけ」人文・社会科学論集第28号 p.77-91

Chickering, A. W., & Reisser, L. (1993). *Education and*

*identity* (2nd ed). San Francisco: Jossey-Bass.

Evans, N. J. (2003) Psychological, Cognitive, and Typological Perspectives on Student Development. In S. R. Komives, J. Dudley, B. Woodard, & Associates (Eds). *Student Services: A Handbook for the Profession* (4th ed., pp. 179-202). San Francisco : Jossey-Bass.

古家聡・石黒武人（2021）『『全員留学』経験者の人間的成長の可視化に関する研究』Global Studies 第5号 p. 19-37

Kauffman, N., Martin, J., & Weaver, H. (1992). *Students abroad: Strangers at home-education for a global society*. Yarmouth, ME: Intercultural Press.

塩田賀津子（2023）「就活に有効な海外留学プログラムの検討」育英短期大学紀要第41号 p.29-37

「トビタテ！留学JAPAN」留学のメリット  
<https://tobitate-mext.jasso.go.jp/about/merit/>

（2025年1月7日受理）